

平成23年度「京都市生涯学習市民フォーラム」の シンポジウムの様子をマナビィが御報告します！



京都で活動する生涯学習関係団体のネットワーク組織「京都市生涯学習市民フォーラム」が総会とシンポジウム「しあわせ発信都市♡京都」を開催するということで、そのテーマにも惹かれてわたくしマナビィが取材に行って参りました！楽しい堀場雅夫会長の進行に笑わせていただきながら、しあわせをじっくり考えましたよ！

日 時：平成23年11月11日（金）午後2時30分～4時

場 所：京都産業会館8階 シルクホール

テーマ：しあわせ発信都市♡京都 ～本当のしあわせって、なに？～

パネリスト：・堀場 雅夫氏（京都市生涯学習市民フォーラム会長／株式会社堀場製作所最高顧問）

・田辺 親男氏（京都経済同友会代表幹事・「ハピネス」特別委員会委員長、親友会グループ会長）

・門川 大作氏（京都市長）

（冒頭）田辺代表幹事による京都経済同友会の取組説明



本年発生した東日本大震災、台風12号・15号の被害を目の当たりにし、自然の脅威に対して我々は謙虚にならなければならないのではないか、経済至上主義

だけでは人は救えないのではないかと考え、京都経済同友会では、本年4月に「ハピネス」特別委員会を立ち上げ、今後、経済に変わる指標を用いて「ハピネス」、皆さんの幸福を追求しようとしています。

紀元前4世紀にアリストテレスが「人生の究極の目的はしあわせ以外にない。あらゆるものはしあわせを追求するための手段である。」と言い、同様に中国の孔子は、人間が生きる目的は「しあわせになるためではないか」と言いました。

「しあわせなんて今どき何をのんきなことを」と言われるかもしれませんが、実は今、世界的にしあわせは豊かな社会の切実な課題と考えられています。

京都経済同友会は、京都市民の生活満足度や幸福感を把握し、それらの尺度がどんな生活意識や価値観に起因するものかを分析し、京都市民が期待する今後の京都の姿や幸福感を高める施策の方向性を探るため、本年7月、京都市在住の20～70歳の男女500人にインターネットによる調査を行いました。調査項目は「生活の満足度」、「生活の不安・不満」、「幸福の要素」、「京都の評価」です。結果はこちら。

〈京都 幸福感調査〉

1.生活満足度 生活に満足している（満足している+まあ満足している）

62.6%

2.ストレスを感じている（強く+やや感じている） 49.4%

十分に貯蓄がない 49.1% 満足な収入がない 43.3%
生活の先行きに不安 41.2% 政治が信頼できない 41.2%
景気がよくない 39.5%

3.人生の満足度（幸福感） 10点中 6.05点

幸福に欠けていること
・先にいくほど人生が良くなること
・夢中になれるものがあること
・日々ワクワク感があること

人生の満足度（幸福感）は6.05点。これはほぼ全国平均並みの結果が出ました。

望ましい京都の姿と欠点は…

①高齢者も楽しめる落ち着いた街 48.6%
②芸能や伝統工芸などの文化都市 48.2%
③若者が多く、活気のある街 33.6%
④近隣の人とのつながりが深い人情にあつい街 31.4%
⑤ものづくりの中小企業が集まった街 30.0%

【京都の欠点】

①市の財政が悪化している 46.0%
②排他的な文化 39.4%
③人間関係が複雑 30.8%
④市政に京都らしさが活かされていない 30.0%
⑤伝統産業不振で雇用先が確保しにくい 27.6%

京都に住むメリットは「文化」「豊かな自然」「高い教育水準」、意外と「食文化」。美味しいものがあることに極めて誇りを持っています。

お金を払ってでも京都に住みたい ～京都流 幸福の方程式～

京都の選択

- ①雇用・・・幸福の源泉は消費より雇用。誰もが自分の能力を発揮でき評価される街。職人が評価される街。
- ②健康・・・医療フロンティアを体験できる街。明るい病院、お見舞いが楽しくなる病院。地下鉄東西線の活用（例えば市庁舎を移転し、高齢者用病院を建てる）。
- ③教育・・・グローバルに通用する人材を育てる教育。

京都の視点

- 人口目標・・・学生や観光客など交流人口を組み込み、適正な人口と人口構成を維持する。京都市への移民も歓迎する。
- 見えない資産価値・・・都人の一員であることの連帯感など見えないものの価値を評価。

京都経済同友会はこれから「京都流幸福の方程式」、
こういった形が京都にとって良いのかということで、
まず、雇用。経済不安、先行き不安を解消するためには、
幸福の源は消費よりも雇用で、誰もが能力を発揮
でき評価されるまち、伝統的なものづくりの職人が評
価されるまちになっていけばいいのではないかと、雇
用に関する方向性を考えています。

二番目には、高齢者が安心安全に暮らせるまちを作
ってほしいという要望。医療フロンティアを体験でき
るまち。明るい病院で、お見舞いに行ったら一日過ご
せる病院や、市庁舎を移転し高齢者用病院を建ててア
メニティゾーンを作るという提案が出ています。

教育についてはグローバルに通用する人材を育て
ましょう。京都は観光の分野では東洋で一番魅力的な
まちで、京都を訪れたい、暮らしたいという方が多い
ですが、受け皿がなかなか整備されていません。そこ
で、人口目標を作ってははどうでしょうか。学生や交流人
口を組み込み、京都市への知識人、移民を歓迎しては
どうでしょうか。資産価値、みやこびとの一員である
連帯感、見えないものの価値を評価してこれから生き
ていったらよいのではないかと考えています。

日本では、ほとんどがこの3つを主軸にして幸福指
標を作っています。

(1)「経済社会状況」

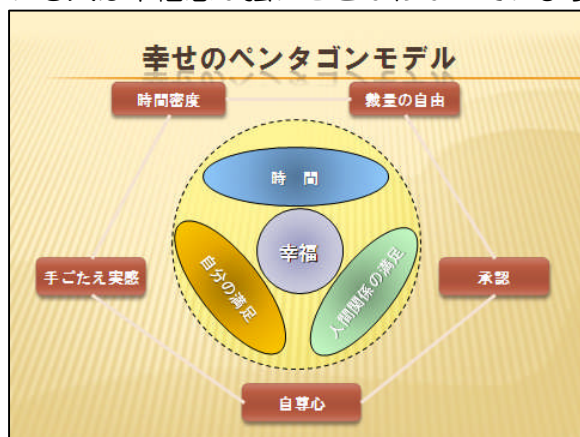
所得と富、仕事、住環境、子育て・教育、安全安心
が重要。

(2) 身体面、経済面での「健康」

健康なときはありがたみを感じませんが、病気にな
ったり怪我をしたりすると、こんなことでもありがた
かったんだなと感じます。

(3) 三つ目の大きな因子が「関係性」

個人・家族のつながり、地域・社会のつながり、ラ
イフスタイル。世界の情報・研究を見ても、一番重要
なのは個人・家族のつながりで、良きパートナー・友
人がいる人は幸福感が強いことがわかっています。



我々が考える「幸せのペンタゴン」では、幸福はど
んな要素から構成されるのかということ、一つは時間密
度（時間的余裕）、裁量の自由という自分で比較的自
由にいろんなことができるのは一つの幸福です。自分
の満足、仕事において評価されている、満たされてい
る、あるいは自分自身がやりたいことを十分にできて
いることは手ごたえ実感や自尊心にも結び付きます。

本当に人間がしあわせと思う大きな要素は、この人
間関係の満足にあります。これは、他者から認められ
ている、評価されているという評価です。

しあわせとは、何かを得た瞬間でなく、これからの
見通しに大きく左右されます。経済的豊かさとともに
心の豊かさも重要です。個人だけでは、しあわせ感が
全て揃うことはなく、「社会の幸福なくして個人の幸
福なし」というのが現在の全体の考え方です。

そのため、幸福研究のための新しいフィールドを京
都に作ってはどうか。また、来月を目途に京
都経済同友会は幸福会計を導入しようとしています。
バランスシート（資産と負債）の損益計算を1つ作っ
て、今後4年間、市政を見て、評価基準ができれば良
いと考えています。

全体のまとめ

- ① 幸福感は全国平均とほぼ同じレベルである
- ② 夢中になることがある「時間密度」、自分のペースで好きな
ことができる「裁量の自由」、成長実感などの「手ごたえ」
が幸福感の源になっている。特に「裁量の自由」は達成感も
高く、幸福感の高さにつながっている。
- ③ 「文化」に対する誇りがきわめて高く、「自然」「教育水
準」「食」「寺社」が誇りの五本柱となっている。
- ④ 若者とシニア層との間に価値観の差がみられる。雇用、子
育て、教育の充実を求める若者に対し、シニア層は現状の維
持と文化の充実を求めている。
- ⑤ それぞれに京都に思い入れがあるものの、いざとなると入り
こめない。複雑で閉鎖的な面を指摘する人が多い。

経済はもともと「経世済民」と言い、世の中を良く
するためのものであったわけですが、これはエコノミ
クスが入ってきたときに「経済」と訳したために「経
世済民」が忘れられてしまいました。

京都経済同友会は、雇用を守り、地域の活性化を果
たすとともに、市民の方々がよりしあわせを感じる社
会の実現のために提言し、実行していきたいと思っ
ております。市民の皆様の御支援いただきたいと思いますので、冒頭の提案という形で京都経済同友会のアン
ケートの御報告とさせていただきます。



（堀場会長）

京都人が幸福をどう見ているか統計的なものを見せていただいたわけですが、問題はサンプルが20～70歳までとなっていることで、私を含めた70歳以上の高齢者は何を考えているか知ることは非常に重要なことです。

実は私も幸福について非常に関心があり、数年前から、幸福は学問としてどの程度体系化されているのかを学識者にも聞きましたが、本屋へ行くと幸福に関する本は非常にたくさんありますね。これなら若いときから勉強ができたと反省していますが、幸福というものをロジカルに考える機会はなかなかありません。しかし一度、自分の人生と幸福を対比し、自分にとって何が幸福で何が不幸なのか、幸福をますますのばし、不幸の要素を除くことを考えていくと、自分の人生も変わり、意識的にできるのではないかということも考えました。ちょうど田辺先生が代表幹事になられて、「ハピネス」特別委員会を作っていただいたことは非常に心強いことで、是非この委員会が発展するように期待しています。

先ほどの御説明の中で驚いたことが、京都市民はこんな良い条件にしながら全国平均の幸福度しか持っていないことです。市長はこの数字はどう思いますか。

（門川市長）

おっしゃるとおりです。京都の文化は全国と比べると素晴らしく、あらゆるものが揃っています。ただ人間の意識というものは、客観的に評価して自分が幸せかどうかということではありません。社会福祉の政策・施設が整っている所でも結構不満が多い。整っていない所で自分たちで努力していこうという所とどちらが幸福か。体制が整っているというプラスの大きい要素があっても、それをしあわせと感じるかは別の概念であると思います。京都のまちのあらゆる情報を把握しながら、それを活かして相互に良い環境を作っていくとどんどん高まる。高まることによって状況が整う。そんな仕組みを作らねばと思っています。

（堀場会長）

よそに行って帰ってくると、「ああ、京都はええな

あ」と思うのは、京都の良さに毒されてしまって当たり前になっているのです。世界中、日本中を見て自分の置かれているのがいかに良い状態かを知ること自体が、まず幸福感を得る一つの方法だと思います。今回のデータで「なるほどなあ！」と思われるものと「なんで？」と思われるものを教えてください。

（田辺代表幹事）

京都の人は人間関係がかなり複雑という答えて、京都の欠点の一つだと言われていましたが、これも良い面と悪い面があり、捉え方一つなのです。「精神免疫学」では、常に陽性感情（ポジティブエモーション）を持つと、体の中に良い物質が出てきます。逆に陰性感情（ネガティブエモーション）を持つと、良い免疫を殺し、寿命にも良くないし、病気を招きやすいし、幸せ感も低くなります。京都の人間関係も最初はとっつきにくいですが、そこを少し入り込むと、京都ほど細やかな神経で人を迎え接する所は他にないのではないかと捉え方もできます。人間関係の複雑なところを逆に面白い、楽しいと解釈すると京都の良さをもっと深く認識できるのではないかと思います。

（堀場会長）

よく聞く「お茶漬け論」はどう思われますか。

（田辺代表幹事）



本当にウェルカムの姿勢で言っている、とても冷淡に扱われたと思われるらしいのですが、京都人は1,200年もの間、様々な戦いの中で、自分たちを守る術を知ってきました。そこで外から来た人に対して「お茶漬け論」のように

一つの障害を作ったのですが、さらに入り込むと、本当のホスピタリティのある京都人の温かいおもてなしの心と接することができるかと解釈しています。

（堀場会長）

純粹の京おんなである母親が「お茶漬け論」には意味が二つあるとはっきり言っていました。しょうもないことをしゃべって昼になったときの「お茶漬けでも食べますか。」は「昼になったのに何をしゃべってんの、早く帰って」という意味やけど、本当にお昼の時間になって、「御馳走はないけどたとえお茶漬けでも

一緒に食べませんか」，という場合と両方ある。そんなこともわからんお客はレベルが低いのではないかと。

（門川市長）

「お昼やし早く帰って」を婉曲に言うという考え方と、おもてなししたい気持ち。互いに気を使い合い、心をはかり合う。そう単純なものではないですね。それをしあわせと感じるか、面倒と思うか…。

（堀場会長）

有名な京菓子店に行って、こちらが「ありがとう」「また寄せてもらいます」と言うと店の人は「へいへい」だけ。店の人は一言もありがとうと言わず、買うほうばかりが言います。一般的にお金を払うほうが偉そうにしてお金を受け取るほうが「おおきに」と言うのですが、「嫌なら買いに来てくれなくて良い」という店の姿勢を生意気やと思うか、堂々たる誇りを持った仕事をしているととるか。これもお茶漬け論と一緒に一つの文化なのです。京都の商売人は単なる金もうけやなしに、高い文化を持ち、まさに「知る人ぞ知る」で、「わからんやつに、うちのもん食べてもらわんでよろしい」という心意気は守るべきだと思います。

（田辺代表幹事）

京都の料理屋さんでもミシュランなどのガイドが出ていますが、そうしたものには載せずに限られた客が通う美味しい店があります。ほんまもんが残っているまちを京都が作ってきたのは、堀場会長がおっしゃったように、ものとお金のサービスとの対価という考え以外の要素、付加価値を作ってきたのであって、京都の誇るべき文化だと思います。

（堀場会長）

産業も京都人には一つの考え方があり、大きな経済変動が起こっても京都の企業は比較的、景気変動に耐えてきました。新しい京都の伝統産業は強い。なぜかと言うと、京都はやはり「まねし」がだめ。人のまねをせずオリジナリティを持つ。やったからには世界一のものを作ろうという考え方は、ずっと昔から京都の商売人の心意気で、そうしているがゆえに景気変動にすぐに対応して浮き沈みが少ないと思います。実際、市政から見て京都の経済はどう思われますか。

（門川市長）

こないだ全国の漬物屋さんの若者の会がありました。日本中で漬物屋さんもお菓子屋さんもお後継者が減っていますが、京都は全然そんなことはない。個性的

で、たくさんの店があるので、みんなで切磋琢磨するし、商売敵なのに仲が良いのです。よそのまねをしないし、新しいものを作ろうとする。そのことを大事にする。堀場会長の会社のように先端企業であってもそうです。京都のまちづくり、経済、市政にしても、東京や外国のまねをするよりも、京都のまちの持っている歴史、ものづくり、大学、地域力などの強みを活かして融合し、観光とものづくりを合わせたり、大学と産業界とが連携したりできる土壌を作ることが京都市政の一番大事なことと考えています。

（田辺代表幹事）

今、雇用が大きな問題で、京都市民にとって先行き不安に思う最大のもので。雇用が失われると収入の道も途絶えます。ベンチャーから上場企業に育つようなサービス業、知識産業を育てるための規制緩和を市長にお願いしたい。製造業のように一工場に数百人数千人雇用が生まれるより、50人でも付加価値が高く、高所得の産業を作って、雇用も派生して増えていくという産業形態を作り上げないと、従来型の産業ではとても生き残れないと感じています。

（堀場会長）

今、国が言っている「6次産業」にすごく興味があるんです。京都市を見ると、農地の割合が他の政令指定都市よりずっと多いと思います。資本主義経済が崩壊している



多くの原因が、3次産業において本当の意味の付加価値がない、一見儲けているけれど人のためにならない金融構造がはびこったからで、それゆえに、近代資本主義そのものに大きなクレームが出ているわけ。1次産業は今手つかずで、本当は日本の農業はもっと近代化されて2次産業を追い抜くべきもののなのに、保護政策のために、戦後66年間、本当の意味での競争力をなくしました。オレンジの自由化でみかんの栽培業者が全部潰れると言われましたが、ナイフなしで手でむいてすぐ食べられて実に美味しいと、日本のみかんは世界で一番高級なものになっています。マンゴーもキウイも日本が一番、自由化したら日本のものは世界一になります。京都は幸いなことにまだ1次産業のスペースがありますので、3次産業もいいけれど、本格的に1次産業を2次化3次化する、たしても6、かけても6の6次産業を次の京都の産業の1つのポイントに持ってくるべきではないかと思うのですがいかがでしょう。

（門川市長）

「ウッディ京北」という道の駅で、京都大学との共同研究で、大根とアスパラガスを合わせた野菜や子宝いもなど、よそに出回らない野菜を作ってもらいました。そうすると、ウッディ京北で販売した売上が1億円になったのです。

たとえば大原でも大成功しています。荒れている畑でみんなで作物を作って商品化し、そこで食べてもらう。6次産業の原点ですね。京都はおかげで年間5,000万人がお越しになる観光地になりました。

地下鉄の道は道路と同じとみなされる規制があります。それを緩和し、最大限に解釈して“駅ナカビジネス”を展開したら、4年前は5,000万円しか稼げなかったのが、今年は4億円の収入があり、200人以上の雇用も創出できました。一部では反対もあるけれど、京都ならではの水族館を作ると、間接を含めて1,000人以上の雇用が生まれるのです。京都は教育水準・福祉も高い、文化もある。問題は若い人の働く場所がないことです。働く場所を作るため、障害を取り除きながら、京都のまちの良さを守っていく。同時に地域ごとの地区計画をつくりながら取り組む。

「市民が残したい京都の遺産」という調査をしました。京都には素晴らしい庭園、お屋敷がありますが、庭園は第1種住居専用地域なので、旅館にもホテルにも博物館にもできません。できるのは宅地分譲かマンションですが、庭園を残したい。維持管理費は植木の手入れだけで年間1,000～2,000万円かかります。今の法律では住居専用地域は宅地分譲・マンションしかできないところに何とか料理屋さんや旅館を持ってこれないか。そんな新たな仕組みを京都から作っていかうと思っています。京都の財産であるお屋敷が使われなければ、潰されてマンションになっていきます。マンションも良いですが、財産を活かして次の世代に使うためには今の規制ではだめです。新しい考え方で乱開発はやめておこう、こういった仕組みに向けて市民の意見を募集しています。

工場は煙と音が出るし、ホテルや博物館には観光バスが来る。これが法律の概念。しかし、煙も出ず、音もしない工場もありま



すし、ホテルや旅館でも静かで近所に一切迷惑かけないところもあります。概念が変わってきているので、それに合わせるべきです。特区を申請し、制度を創り変えながらやっていかうと思っています。

（堀場会長）

昔、工場は多くの人働き、もくもく煙を出し、汚い水を出す前提でルールが決められました。今、我々の会社から排水する水は京都の上水道と同じレベルを下水に出しています。排出するガスもきれいにし、工場があるために普通の空気より綺麗になっています。それくらい変わっているにも関わらず、工場は端に追いやられて、まだ面積が大きいとか建ぺい率とか言われます。

それに交通です。北に住んでいるので京都を南まで横断して通っています。ビルを建てて、上の階に住み、真ん中の階に工場、下の階を商店街にしたら、エレベータで出勤時間は5～10分。通勤に約1時間かかる人は1日に2時間ロスしていることになるのです。365日で700時間、10年で7,000時間、20年で14,000時間。これは2年生きているのと同じくらいの時間です。どんな事でも1,000時間したらプロになれる。飛行機・ヘリコプターも操縦できるし、ゴルフのプロにもなれます。それほどロスしているのが、ちょっとした考え方で、人生倍にのばせますよ。

（門川市長）

“コンパクトシティ”という考え方ですね。そのために現行制度のもとでできること、将来のビジョンを明確にした中でできることを考え、同時に国の制度を変える。そのためには気運を高めなければなりません。市民が残したい庭園、文化遺産、住宅を自薦他薦していただき、残すためにはどうすればよいか。京都市の制度では限界があります。国の制度を変えてもらい、同時にお金もいるので基金を創って買い取っていかうという動きを始めようと思っています。

御池通の自転車置場も昔は絶対設置できませんでした。道路は自転車を置くところでないと。しかし、どちらにせよ置くのだから並べて置けるように民間でやっています。一つ一つ制度を変えていきます。

（田辺代表幹事）

新聞やテレビで皆さん御覧になったかと思いますが、法政大学大学院が都道府県の幸福度調査をしたランキングが発表されましたね。京都は下から5番目くらいで、一番下は大阪。なんで京都がこんな下位なんやと思われたかと思います。

あれは対象・項目の取り方の問題で、生活保護や就業者、女性が仕事に就いている比率など、社会学的な因子が大きく取り上げられていたので、生活保護の人が大都市に多いのは仕方ない面があるので下の順位

になっていました。

京都はこれだけ大学があって我々産業の源になっていて、高い医療の質も担保しています。今、京都市民の147万人市民の1割以上の大学生をうまくリンケージさせたいのです。西洋や東アジアの非常に高い学識のある人は、京都に住んで研究し、産業にフィードバックしたいという思いがありますが、そういった人を京都に迎え入れるような仕組みを作りたいです。

（堀場会長）

優秀な学者を呼びたいし、来たい人もいますが、住居問題になると途端に京都は非常に難しいです。市や府もさることながら、一般市民も含めて財団のようなものを作って、空き家の内部をリフォームして、外国の人も住めるようにして住居問題さえ解決すれば、相応な人を呼び込める自信があるんです。

（田辺代表幹事）

カレッジタウン的なもの、町家風の京都の良さを生かして寄宿して、みんなで英語や日本語で話しながら…そういうまち・場を作っていたら京都の産業も活性化するし、我々が考えられないような新しい産業が起こる可能性があると思います。

（門川市長）

大学コンソーシアムでは500以上の単位を取得できますが、非常に面白いのが、理系の学生さんから花園大学の「禅と日本文化」という150人くらいの講座に5倍の申込みがあったことです。京都の大学に行きたい人は禅などの日本の文化を学びたいのです。

それから住宅の問題、京都の町家5万軒の1割、5,000軒が空き家なのをなんとかしたいですね。学生は、郊外の学生マンションより街中に住みたいはずなので、貸していただけたらと思います。

東日本大震災で市営住宅をお貸ししました。市営住宅だけでなく空き家を無償で提供してほしいと市民の皆様へ声をかけました。保険をかけて被災者に貸すというのに400軒。不動産屋さんがボランティアで調べに行って実際は100軒くらい貸すことができました。これも次に、留学生に貸してもらえないかということで、買い取るファンドを作っています。



（堀場会長）

そうして、海外から来てもらう仕組みができれば、京都は国際都市になりますよね。

（田辺代表幹事）

東京の人と話すと、京都だけは別格なんですね。我々から見たら東京ほどものが全て集まってすごいところはないと思うのですが。京都の良さを見直して感動のある都市・京都をみんなで作り上げていく、しあわせ度を上げていくことをしていきたいですね。

◆会場からの質問と返答

○質問1（男性）

ものや設備があるから幸せではない。幸せの捉え方がいろいろあり、病気をして不幸と思ったが、家族がまとまって良いほうに向かったので、物事自体が幸せでも不幸ではない。病気だから不幸、家族がまとまって幸せ、良いことがあったからと一喜一憂しない強い生き方が幸せなのかなと思います。

（堀場会長）

おっしゃるとおりで私から言うことはありません。

○質問2（男性）

個人の幸福の背景には社会の在り方があったと思います。「ワーク・ライフ・バランス」が基本計画にも大きく掲げられていると思いますが、経済界の方たち、京都市の中で一番大きい組織である京都市の中でどういうビジョンをそれぞれ描いておられますか。

（門川市長）

今年から10年間、京都のまちをどんなまちにしていくか、徹底した市民参加で、多くの識者の意見を聞きながら京都市基本計画「はばたけ未来へ！京プラン」を作りました。そのとき中間案までは目指すべき京都の像は5つでした。そこに35歳までの若い人たちの会議で出た「真のワーク・ライフ・バランス」を追加して、6つの目指すべき京都像として出しました。まず人間らしくいきいき働く。同時に家庭生活、個人としての生活を充実させる。そして地域・社会への貢献。この3つのバランスを取っていこう、新しい京都の市民の生き方にしていこうというのが市民提案で出てきました。それなら、市役所もちゃんとやらなきゃいけないかと。例えば京都おやじの会連絡会が、「OK企業」＝おやじの子育て参加に理解のある企業という取組で、家庭、地域社会の中で考えていこう、地域社会も新しい人がどんどん参画しやすい地域社会にしていこうということで、新たに京都市民が作る真のワーク・ライフ・バランスが活かされる社会、京都の

未来像を作っていきたいと思います。

○質問3（女性）

私は去年までひどく足が痛く、そのとき感じたことは、地下鉄の多くの駅でエスカレータ・エレベータが改札と遠かったり、エスカレータが昇りしかなかったりします。階段を下りるときの負担が大きいのです。足の悪い者だけでなくベビーカーもそうなので考えてもらいたいといつも感じています。

（門川市長）

国もまず1日5,000人以上の乗降客の駅をバリアフリーにしようと思いました。ただ、まず1駅に1箇所を計画的に整備していこうということになりました。私鉄（民間）も含めてやっと5,000人以上の駅に1箇所つけましょう、次に3,000人の駅につけましょう、これが現実です。今、京都で大問題となっているのが烏丸線にホームドアがなく、人が転落する危険があることです。安心安全のために何を最優先にしないといけないかという点でバランスを取りながら進めたいですね。

（堀場会長）

日本は身体障害者へのカバリングが先進国で一番悪いと思います。車いすで一人で移動するのは本当に大変です。何をするにしても京都が先端に行くことを考える。京都がやっているからそちらでもできるやろというまちにするのが理想です。

質問はこれで打ち切りますが、まだある方はお手紙でもはがきでも送ってください。直接皆さんの御意見を反映する良い機会ですし、前向きな御意見をいただくことが市民フォーラムの大きな役割でもあるのでお願いしたいと思います。

先日、「外国人が日本に観光に来る動機」の順番データを見て、えっ！と思ったことがあります。トップは「日本食」。今まで、日本の歴史や文化が上位で、食は3番目くらいかと思っていたら、圧倒的に日本食。京都は特に外国人が行きたいところ。食ではっきりしているのは、高くておいしいのは当たり前、安くてもおいしいのも当たり前、この値段でこんなおいしいもの！というものが食の最高のものです。市としてもっと力を入れてほしいし、経済同友会でも食に特別委員会を設けてほしいですね。

（田辺代表幹事）

昔、経済同友会に食育委員会があり、子どものおはしの持ち方、マナーで食育委員会というものを作ってい

たのですが違う観点から考えてみます。

（門川市長）

食は健康、教育、自然に感謝するというあらゆる文化の集積で、世界から注目されているものですね。

（堀場会長）

食文化では、京都には京野菜もあるし、「京都牛」というブランドもあったと思うけれど…

（門川市長）

おっしゃるとおり良い牛で、「京都肉」として、ブランド化されています。全国にある中央卸売市場の中で、京都は下から2番目の規模なのですが、和牛が78%です。全面的に建て替えるので、もっと見に来てもらって京都の肉を誇りを持って食べるようにしていきたいですね。全頭検査もしているので（安全安心です）。

（堀場会長）

最初にも出ましたが、京都にずっといると京都のありがたみがわからないけれど、客観的に京都を見ていただくと、新しい発見があります。地方から出てきた人に「これ、すごいね」と言われて、昔からあるやんと思って改めて見ると、すごいなと思うものがいたるところにあるんです。逆に地方へ行って、「見てください、これ300年前の…」と誇らしく言われますが、300年前のものは京都にはいたるところにあることを考えても、贅沢になりすぎているのではと京都にいるありがたみを考えるべきだとこの年になって心新たにしています。

もう1つ、難しい問題で、「男女同権」という言葉があります。私は男女に対するあり方について、京都は先進都市にすべきだと思っています。ただ「男女同権」という言葉には抵抗感があります。神様が男と女、生理的に違う状態で2種類作って、男はどんなにがんばっても子どもを産めないし産むのは女性。基本的に女性と男性で明らかに違う点もあり、全く同じ「男女同権」は生理学的にありえないので、人格的に「男女同格」で、違う権限を持っている。精神的にも肉体的にもリーズナブルな男女同格の都市というのは京都にあるということ、これも同友会のテーマとして田辺先生が代表幹事されているときに取り組んでいただき、京都市に提言してどんどん進めていただきたい。確かに我々の企業でも女性の管理職が少ない。管理職は普通の企業なら24時間勤務。全世界に工場がある

から時差を考えると、勤務状態も管理職は今の労働基準法を守っていたってどうしようもない、でも現実問題としてはそういうこともあるから、合理的に本当の意味でも男女同格の都市というものも京都でやっていくべきではないかと提案したいですね。

（田辺代表幹事）

先ほどのワーク・ライフ・バランスの話で申しますと、ドイツのエアランゲン大学（ドイツでもっと古い大学の一つ）とシーメンス（世界的な医療機器会社）は、朝働いて5時に終わって残業なしだそうです。そこから家庭を楽しむ人、社会貢献・ボランティアをする人、趣味に走る人がいます。病気になったときに一番支えてくれるのはやはり家族、親密なパートナー、あるいは親しい心許せる友人です。そういう人を支えられているというのは、実はしあわせ感に結び付いているということで、ワーク・ライフ・バランス全体を見直すということをやっていくべきで、価値観の本当に変わる年じゃないかと思います。

（門川市長）

“しあわせ発信都市”ということで、今年も婚活イベントを開催しました。結婚したいと思っている方々はいっぱいいらっしゃいますが、実際にはあまり結婚されない。しあわせや家族の絆を育てていくには、そういう方々の背中を押してあげないと。

去年婚活イベントを通じて結婚した方が、私を結婚式に呼んでくれました。お母様が、去年40歳の娘に、新聞を切り取って京都市が婚活イベントを開催するから申し込みなさいと渡したが、あの切り抜きを見つけれなかったら今日の日はないんですと喜んで言ってくれました。日本人の3人に1人が一人暮らしで、家族の絆や家庭の根幹が揺らいでいますが、結婚しようと思っている方がたくさんいらっしゃいます。

（田辺代表幹事）

去年、経済同友会で少子化問題を取り上げましたが、原因をとことんつきつめると実は非婚化。結婚しなくても子ども産んだらいいけれど、日本の風土では難しいですね。市長が言われるように非婚化、女性が結婚を避けている傾向があります。非婚化を経済的問題も含めて解決していかないといけません。婚活、がんばっていただきたいです。

（堀場会長）

最後に、市政に「京都に來れば結婚したくなるまち」というテーマを1つ入れていただきたいと思います。

皆さん、京都人であることを誇りに思い、感謝をして、来年の生涯学習市民フォーラムに、元気でお友達も連れて御参加いただければと思います。

～ 番外編 ～

- シンポジウムの前には、「京都市生涯学習市民フォーラム」総会も行われました。



堀場会長の「京都に生まれただけで宝くじに当たったようなものですよ。」というお話に登壇者も笑顔。

生涯学習を推進した方 49 名の功績をたたえる表彰も行われました。



- 会場の外では、「京都市生涯学習市民フォーラム」加盟団体の活動を御紹介するパネル展示も開催され、大変賑わっていました！



京都経済同友会さんのパネルもあったよ。

